第１８回　東京芸術文化評議会　議事要旨

１　日　　時　　平成２５年１２月２日（月曜日）午後４時００分から５時１５分まで
２　場　　所　　東京都庁第一本庁舎７階　大会議室
３　出 席 者　　猪瀬都知事
　　　　　　　　秋元評議員、浅葉評議員、三枝評議員、杉本評議員、野村評議員、
　　　　　　　　花柳評議員、平田評議員、深澤評議員、福原評議員、宮田評議員
　　　　　　　　吉本専門委員
４　議　　事　　オリンピック文化プログラムについて

５　発言要旨

○福原会長　ただいまから第１８回東京芸術文化評議会を開会します。

皆様、お忙しい方ばかりなのですが、御出席いただきまして、ありがとうございます。本日は安藤評議員、蜷川評議員、森評議員が御欠席との御連絡をいただいております。この方々からは、後ほど御意見をいただこうと思います。

早速ですが、猪瀬知事から御挨拶をいただきたいと思います。

○猪瀬知事　今日はお忙しいところ、お集まりいただきましてありがとうございます。

９月７日にブエノスアイレスのＩＯＣ総会で２０２０年オリンピック・パラリンピック開催が東京に決定いたしました。招致機運の盛り上げに当たり、文化団体の皆様に多大な御協力をいただきました。また、６月に開催された東京芸術文化評議会では、さまざまな御提案をいただきまして、都立文化施設の開館時間延長など、直ちに実行に移すことができました。評議員の皆様を始め、多くの芸術関係者に御礼を申し上げます。

また、開館時間延長を含め、今年から六本木－渋谷間のバスを金曜日に深夜運行することになります。例えば、サントリーホールや東京芸術劇場などに皆さんがアートを鑑賞に行かれて、午後７時に開演し、１０時半頃になると、アンコールの手がだんだん弱くなり、終電時間を気にするようになってしまいますので、そういうことがないように、ニューヨークのブロードウェイは午後８時から始まりますが、バスは深夜運行していますから、アートを目指す人も増えるし、お客さんも増える、ということで時間の概念を少し変えていく必要があるのではないかということであります。森美術館も夜遅くまで開館していると聞いておりますけれども、１２時までとか、深夜バスが運行すればそういうことも考えられる。オリンピックもある意味でアートの１つですから、オリンピックはスポーツの祭典であり、文化の祭典であります。オリンピック憲章にも、文化プログラムは複数の文化イベントを計画しなければならないと定められております。

ロンドンオリンピックでは、英国文化の力を最大限に活用して成功をもたらしました。このロンドンのレガシーをしっかりと受け継いでいきたいと思っております。東京大会で国内外から訪れる多くの人々を文化でおもてなしするためには、２０２０年まで７年間、長いように見えて決して長くはないので、今から取り組みを開始する必要があると強く思

っております。特に、オリンピックムーブメントの盛り上げとともに、文化五輪としての世論を形成することは非常に重要であります。また、日本全体が一体となって取り組むためには、都民、国民の力を結集して、オールジャパンの体制で大会成功に邁進していきたい。このオールジャパンの体制というのは、当然ながら、被災地の復興というものを重要な要素として考えていきたいと思います。

８６９年の貞観地震から約１００年後に詠まれた、「契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは」は百人一首の恋の歌なのですが、末の松山、松山の波がいっぱい越えて、最後は越えなかったよねということを男女関係の比喩にしている歌なのですが、これは清少納言の父親による歌です。いろいろな災害がどこか文化の中で語られるようになっていくと思うんです。東京オリンピック、２０２０年オリンピック・パラリンピックを受けて、さまざまなシーンがあるが、この文化のシーンをいろいろな形で生かしていきながら、東京オリンピック・パラリンピック後のレガシーにも残るような、そういうものにしていければ一番いいと思っております。

本日は、お忙しいところ、各界の第一線で御活躍されている評議員の皆様に、東京の都市力を文化から、これまで以上に押し上げるために、東京大会に向けての具体的なアイデアをいただきたい。オリンピックをやっただけではないものを将来に残していきたいし、今からたくさんの方々も外国から来ていますから、そういう方々に、オリンピックと文化を結びつけていく、日本の伝統文化を含めた、あるいはクールな新しい文化を発信していけるようなさまざまな試みを御提案いただければと思っております。どうもありがとうございます。

○福原会長　ありがとうございました。お話のように、ロンドンオリンピックは文化プログラムが大変充実していたと聞いておりますので、これについてはまた別途、関係の皆様にロンドンからおいでいただいて、一体何をどうやって、何が残ったのかということを説明していただく予定もございます。

今日もオリンピックの文化プログラムについて、皆様に限られた時間でお話をいただきたいと存じておりますが、事務局から本日の資料について説明をいたします。

○関文化振興部長　お手元にお配りした資料は、次第、資料１「２０２０年東京五輪　文化プログラムについて」及び、杉本評議員、宮田評議員、三枝評議員から提出していただいた資料です。３人の御発言の際には、スクリーン上に概要等を表示しますので、お手元の資料とあわせて御参照いただきたいと思います。

○福原会長　それでは、本日の議事は、「オリンピック文化プログラムについて」であります。本件につきましては、先ほど猪瀬知事からの御挨拶にありましたとおり、９月７日ブエノスアイレスのＩＯＣ総会において、２０２０年東京五輪開催が決定しましたので、２０２０年までには、あと７年余りが残されているわけですが、準備のための時間として決して長くはありません。この間に十分な準備をする必要があります。各評議員の皆様におかれましては、文化五輪としての東京大会実現について御議論をお願いしたいと思っております。

それでは、オリンピック文化プログラムについて、事務局から説明をいたします。

○関文化振興部長　２０２０年東京五輪文化プログラムについて説明をいたします。ロンドン五輪では、２００５年７月の開催都市決定後、組織委員会に文化部門が設けられない中で文化プログラムの具体化が進められました。２００８年の北京五輪終了後から文化プログラムは開始されましたが、２００９年秋の企画チーム、２０１０年1月イベントチームの設置により、ようやく組織委員会の中に文化部門が位置づけられました。英国には歴史あるアーツカウンシルがフェスティバル実行の中心的な役割を担い、大会直前の２０１２年６月から開かれたロンドンフェスティバルを成功に導くことができました。

東京オリンピックのスケジュール（案）ですが、開催都市決定後、文化プログラムの策定、文化五輪としての世論形成、アーツカウンシル東京の機能充実などについて、本日の芸術文化評議会から議論をスタートし、リオデジャネイロ大会までに議論を取りまとめる必要があります。リオデジャネイロ五輪終了後から文化プログラムを開始し、ロンドン大会と同様に、３年間のプログラムと大会直前の短期集中的なフェスティバルにより、オリンピックムーブメントを最高潮に高めたいと思います。

説明は以上です。

○福原会長　オリンピック文化プログラムの策定に当たっては、ロンドンオリンピックの成功事例に学ぶことが絶対必要だと思いますので、ぜひともオリンピック組織委員会の中に文化プログラムを検討する組織を早期に組み込み、議論も深めてもらいたいと考えております。

では、今日お集まりの評議員の皆様から、オリンピック文化プログラムについて御提言などがありましたら、御自由に発言をいただきたいと思います。発言順は、平田評議員、杉本評議員、宮田評議員、浅葉評議員…という順番でお願いをいたしたいと存じます。よろしくお願いします。

○平田評議員　私の専門の１つは芸術教育ですから、ぜひ子供たち、若者たちにできる限りオリンピックに向けて、例えば東京都に住む全ての子供たちに生の舞台芸術、音楽、演劇、バレエなどを１年に必ず２回ずつは経験させるというような、数値目標をきちんと決めていくことが非常に重要なのではないかと思います。

その中で、さらに幅広くということと、非常に才能を持った若者たちが東京、東京周辺、また、被災地にもおります。そういう方たちが世界に発信できるような機会を設けていく。この裾野の広がりと、そのトップレベルのものを若者たちがつくる、この２つが一番大事なことではないか。オリンピックを通じて、スポーツだけではなく、芸術文化に携わる若者たちも希望を抱ける、そういう施策が一番重要なのではないかと思っております。そのことをこれからもう少し具体化していければと思っております。

○福原会長　ありがとうございます。

それでは、杉本評議員、お願いします。

○杉本評議員　最初に、文化は国力であり、アートはその戦略であるとうたってありますけれども、今回、オリンピックを成功させるために文化プログラムをどうやってつくって

いくかという個々の提言はいっぱいあると思うのですけれども、その大枠をどうしたいかということなのです。総合的なプログラムを管理・運営できる、才能ある人をどうやって見つけるかということが一番の大枠の問題としてあると思うのです。

いつも言っているように、フランスが非常に文化をうまく使って、自国の国力を誇示するメディアとして使っているわけですけれども、日本人はそういうのは非常に下手なのです。ある１つのキーワードとしては、日本がこれから資本主義へずっと拡大再生産を続けて行き詰る可能性がある中、自然との共生を日本文化がどうやってきたか。日本の今の工業技術の細かさは、縄文時代の自然との細やかな交感から生まれていると私は思うのですが、そういうところで世界に何か考え方として提示できる、新しい文化によって提示できることはないかと思っています。

アートや演劇など、いろんなジャンルで非常に才能があるなと思われる３０代ぐらいの方たちがたくさんいるのですけれども、そういう人が発掘されるシステムが日本にはほとんどありません。大御所の方が大きくプログラムを考えるのもいいのですけれども、２０２０年頃に旬を迎える人たちを今から目をつけて、準備をさせていくという方法をどういうふうにしたらいいか。越境するメディアと言っているのですけれども、演劇、ダンス、現代美術などのジャンルがなくなってきています。美術館の中でパフォーマンスをやるとか、演劇をやるとか、オペラを現代美術家が演出するというのは日常的になっています。青田買いではないですけれども、そういう才能をうまくまとめて、文化的アーキテクトとして、建築、物をつくるだけではなく文化的なファクターを建築的にうまく結びつけて文化の力をつくっていこうということです。

昔、ニューアカデミズムという人たちがいましたけれども、３０代の新世代論客と言われる世代から、まとめ役を我々が探すシステムをここでつくりたいと思っています。リオデジャネイロが終わったころに本格的なプログラムを考えてもらうということを大枠の議論として御提案したいと思います。

○福原会長　ありがとうございます。

このオリンピックプログラムについては、実際にスタートするときに、今のような若手の方も含めて、何百人、何千人のヒアリングをしなければいけないと考えています。ロンドンはそうしているのです。今のことを念頭に置くべきだと私は考えています。何しろ７年後のことですから。

○杉本評議員　あともう１点、越境する文化です。外国で日本的な感性に圧倒的な影響を受けている作家も多いのです。そういう人たちは最初から日本好きなのですから、その人たちが自国の文化にいかに日本の精神が入っているかということをここで実際にやると、国際的な発信力としては、プログラムとして非常におもしろいと思います。

○福原会長　そのとおりだと思います。

それでは、宮田評議員に上野の杜の芸術文化特区構想を含めてお願いいたします。

○宮田評議員　上野の杜は明治維新以降、化石のように変わらずに現在に至っています。「上野の杜 芸術文化都市構想」、２１世紀の「文化立国日本」を世界に発信するためには、

まず、この上野の杜というものをもう一度見直そうという考え方を私は持ちました。

上野の山は大変な知の集積であると同時に自然の集積でもあります。東京国立博物館、国立科学博物館、上野動物園、東京文化会館と、東京都と国の機関が混在している他、東京藝術大学のような大学教育機関もある。それぞれが点在して、隣とは何の関係もなくこの１３０年を過ごしてきたことに対して大きな反省を持って、あらゆることをあらためて構築し直し、この枠をとっていけば、世界最高水準のものが得られるのではないか。特に芸術文化に対する資産は、それを活用することによって大いに日本というものをつくることができるのではないかと感じています。現在、有料の入場者数は１，１００万人ぐらいいますが、私の試算では、最低７年経てば３，０００万超の有料入場者を生み出す国際遊学都市をつくることが可能ではないか。文化が確実に経済と連携をとれるということを申し上げたいです。

上野は、過去に津波を受けた事がないようなしっかりした台地です。地盤も含め、いろんな意味も含め、上野を拠点とすることが大変大事なことではないか。上野・谷根千・本郷・秋葉原・神保町と、最後は江戸城まで持っていこうかというぐらいの気持ちでおります。なぜかと言うと、上野を芸術や学術だけのものにするのではなく、街、民間との連携もきちっととることによって、大きな意味での都市構想、芸術の都市構想ができるのではないか。今度上野においでになっていただくとわかりますが、以前のようなただこんもりとした杜ではなくて、実によく整備されました。これは東京都のおかげです。その上野の各施設では、非常に多様な芸術文化構想ができ上がっておりますが、この連携が全くできていない。ここに、いわゆるコンダクターが必要ではないかということです。そのためには、基盤をきちっと整備していかなければいけない。そうすることで、価値ある世界に伍していける経済効果を生む国際遊学都市ができ上がるのではないかという気がしております。

上野、ロンドン、北京、ソウル、ワシントンといろいろありますが、ほとんど似たような面積なのです。ところが、残念ながら、上野は１，１００万。現在、とても怖いのは、韓国がものすごく大きいのをつくっています。人間はえてして箱に負けてしまうということがありますので、中身は十分私たちは持っておりますので、しっかりとしたものをつくっていきたいと思います。最低でもワシントンＤＣぐらいの数を２０２０年ぐらいまでには持っていきたいと思います。先ほど猪瀬知事がスポーツと文化と言いましたが、クーベルタンのスポーツ、文化、教育、この３つを言っていただけたらありがたいと思います。私がいつも思うのは、２０２０年で終わるわけではないのです。２０２０年はホップであると。その後、ステップ、ジャンプとなっていくことを考えた時に、教育を考えると、やはりこれだけの土地に約３，０００万の人が来て、なるほどと言ってもらえるような環境ができたらいい。

上野の山だけを見回しますと、ちょうど昔、アポロ計画でアームストロングが月面に一歩足を踏み入れた時のような感じですが、明治維新で一番最初に政府は、上野の杜を博覧会や競馬場にした。常に上野の山から発信していたわけです。歴史は戻るということを感

じたときに、ここから改めてつくり込んでいくのもいいと思いますが、単に１カ所だけを持っていくわけではない。東京大学からは学術文化、東京藝術大学からは芸術文化、そして、秋葉原でクールジャパン、神保町で明治大学が漫画博物館をつくろうとしております。そういう動くカルチャーも入れて東京駅まで持ってきて、江戸城の天守閣も含められればいい、という大きな流れをつくる。ここへ来る人が日本のどこへ行けば文化が見られるのか、皆さん迷っています。そんな時こそ、上野の山にぜひ来てください。日本語はありません。あらゆる多言語で皆さん話しています。とした時に、コンシェルジュの場所をつくってあげたい。今、東京藝術大学の中にコンシェルジュの土地を提供しようとしています。ここから、文化や芸術が日本中に散らばっていくように、人々が流れる環境をつくっていきたい。

そうしますと、日本の芸術文化と街、ポップカルチャーを含めてこの流れがずっと連携していくのではないか。世界最大のアート・プラットフォーム、アート・ダイバーシティ、シンボルゾーン、アーカイブ、大事ですね。そして、人を育てるためのグローバルアート、イノベーション、インキュベーターとするには、土台としてここにある、江戸から明治にかけてできた、東京の文化ネットワークをつくっていきたい。

最後になりますが、文化面を支えるためには、国と区、民間との垣根を超えた施設が有効に利用されなければいけない。そこで、英語だけでなく、多言語化がものすごく必要になってきます。

最近、ＰＡＳＭＯとＳｕｉｃａが関西でも使えるようになりました。共通パスをつくりましょう。猪瀬知事が、地下鉄を全部共通にしたいと言っていましたが、それは本当に便利だと思います。海外の人がパスを持つときの喜び方を私はよく知っていますが、共通パスは移動も含め、いろんな機関もパスでいけるという捉え方をすることもとても大事なことではないか。これをポータルサイトとしていくならば、「おもてなし」にもなる。

これだけ大きな空間に自然と文化施設が一体となっているところはありません。ここを使わなかったら２０２０年は失敗しますという気持ちで、ぜひこの中にいろんなものを入れていけたらと思っています。

○福原会長　ありがとうございました。とてもたくさんのキーワードを含む御提案ですね。これはゆっくりまた考えて分析していかなければいけないと思っています。それでは、浅葉評議員、お願いします。

○浅葉評議員　まだ提案書はできていないのですけれども、猪瀬知事には手紙をお出ししてありまして、東京五輪は亀倉雄策氏、札幌五輪は永井一正氏、そして長野は青葉益輝氏、私、原研哉氏がデザインを担当しまして、グラフィックデザイン側がベースにつくとうまくいくのではないかということです。現代のダヴィンチと言われている、トーマス・ヘザウィック氏は、印象深い聖火台をつくり、ロンドン名物のバスをリニューアルしました。一番印象的なのは、上海万博でたわしみたいな建築でロンドン館をつくりました。見た目はたわしのようですが、アップで見ると、その先に色々な植物の種が入っているのです。そういう生命を発想の原点にしているデザイナーです。

ロンドンに着いて最初に行くのはデザイン・ミュージアムですが、残念ながら、東京にはデザイン・ミュージアムがない。今、三宅一生氏と文化庁の青柳長官とここ２～３年でデザイン・ミュージアムをつくりたいということを構想しております。提案書をもう一度書きますので、よろしくお願いします。

○福原会長　ありがとうございました。それでは、三枝評議員、お願いします。

○三枝評議員　前回の評議会でお話しした点、世界で今一番有名なのは初音ミクだと思います。７年後まで初音ミクが生きているのか、話題になっているのかよくわからないのですが、初音ミクのすごいところは、ヤマハがつくったボーカロイドという新しい機械でシンセサイザーによって歌う。今カラオケで１０人中５人が初音ミクの歌を歌うのだそうです。そのために初音ミク用のボタンというのがありまして、普通の声で歌うと初音ミクの声に変わるというボタンもできたと聞いております。アメリカ版も今度出ました。ロンドンオリンピックのときに日本の代表として初音ミクが参加すべきだとか、初音ミクを世界の歌姫として扱うべきだという意見もあったようですが、実物の人間がいないものは歌手として扱えないと却下された。日本では、そういう、バーチャルな歌手というのも考えられるのではないかと思います。若い人たちの間では、初音ミク風に歌うのが非常に流行っておりまして、普通の人間が初音ミクみたいに歌うのです。機械的に歌うというのでしょうか、ロボットみたいな動きをする。日本が１つの新しい潮流をつくったと私は見ています。その潮流をどういう形で使えるのか。初音ミクではなくて、それはお芝居にも転用されたり、いろんなものに転用できたら、バーチャルと現実という、この２つがどううまく融合できるか。そういうことも１つの大きなテーマだと思います。

具体的にいいますと、今、私が見ていて、世界でオリンピックといっても知らない国がいっぱいあるのです。

先日、地球儀を買いました。地球儀を見ると、おもしろいなと思ったことがいっぱいあります。同じ緯度にいながら、温度が違う生活がある。エジプトと長野は同じ緯度にあるのです。長野は雪が降って、エジプトは雪が降らない。世界は同じ緯度にいても随分違う生活をしている。その時、今回のオリンピック参加国の一品お料理、１つお酒、１つ男女、この人たちを見たい、食べたい、飲みたい、こういうブースをどこかにつくってくれたら、オリンピックをとても楽しく見ることができるのではないか。その国の人と仲良くなれて、応援をしようという気になれば、それもまたおもしろいだろうと思っております。

もう１つ、猪瀬知事が今度実験される渋谷までの深夜バス。渋谷からは、横浜方面へ行くバスの連絡があるのだそうです。２４時間運転がせめて金曜日あたりにできれば本当にうれしい。２４時間の都市をつくったら、経済効果が高くてみんなが元気になり、お金が回るようになるような気がします。夜遅くまで遊んでいるのがいけないというよりは、むしろ、夜遅くまで何かができるということがもう少しできたほうがいい。２４時間動かすことがオリンピックに向けてできないと、世界の大都市と言えるかどうか。ニューヨーク、ロンドン、パリ、みんな動いています。世界の都市で動いていないのは日本ぐらいかなと思っています。

実は東京には２，０００人入るクラシック専用ホールが８つから１０あります。御存じのように、渋谷から始めると、オーチャードホール、ＮＨＫホール、新宿に東京オペラシティコンサートホール：タケミツメモリアル、新国立劇場、池袋に東京芸術劇場、上野に東京文化会館、墨田区にすみだトリフォニーホール、東京駅に東京国際フォーラム、さらに文京シビックホール。こんな国はどこにもないのです。ニューヨークにもベルリンにもウィーンにも、パリにもないのです。クラシック専用ホールが１０もある国はどこもないのです。なおかつ、この国は不思議なことに、オペラ団が３つあります。東京都に３つもあるような国はないのです。大体どんなものであっても２つです。それが藤原歌劇団、二期会、そして新国立劇場という３つ。オーケストラが１つの都市に８つも１０もあるという国は世界どこにもありません。そういう意味では、世界最高の文化都市でありながら、その力を発揮できないでいると思っています。

私は、ジャパン・ヴィルトゥオーゾ・シンフォニー・オーケストラという名人たちを集めたオーケストラをやっておりますが、少なくともベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団と同じとは言いませんが、匹敵する、サッカーで言うとベスト５に入るようなものがつくれることは事実です。それぐらい日本人はうまいが、力が分散しているのでとても残念に思っています。ついては、オリンピック前に選抜のオーケストラを世界中に持って行き、ザルツブルク音楽祭のように主要な音楽祭に出場すること。そして、日本人が西洋文化をちゃんと理解しているということを見せる必要がある。グローバルスタンダードというのは、残念ながら西洋文化になっているような気がします。そういう土俵で１回勝負をする必要が私はあると思っています。１００年後に日本語はなくなると聞いています。５００年後には、世界中が同じ言語に変わる。その時に、西洋文化が基礎になっているということであれば、一番代表できるものがこのオーケストラではないかと思う。日本人はすごいということをどこかで見せたいと思います。

そのほか、幾つかあるのですが、もう１つ、神武天皇の即位紀元２６００年を祝う、紀元二千六百年式典のときにブリテンやリヒャルト・シュトラウスに作曲を頼んだのです。皇紀二千六百年奉祝楽曲というのがありましたが、それから戦争になってしまったために、曲を書いて演奏もしているのですが、なかなか再演していません。また、平家物語というオペラをつくって、ワーグナーのニーベルングの指環に匹敵する長さの１６時間、4日間の公演を２０２０年にやったらおもしろいのではないかなと思っています。

それからいろんなことを考えておりますが、最後に申し上げた、紀元二千六百年式典のときには、世界中の作曲家、国に頼んで作曲してもらっています。名曲は生まれておりませんが、日本の国威を発揚するためにその当時の政府が頼んだのだろうと思います。

〇福原会長　ありがとうございました。

前に指揮者の大友直人氏からお話を伺いましたが、こんなに毎日シンフォニーをやっている都市はないと言われていましたね。

〇三枝評議員　そうなんです。

〇福原会長　それだけの力があり、食についてはシラク氏が大統領の頃に文化の交流とい

うのはまず食の交流から始まるのがいいのだという話をしていました。ただ、初音ミクについては、ここにいる人たちは理解できない状態です。先ほど杉本評議員がおっしゃったように、若い世代の人たちにこの辺をちょっと考えていただくほかないと思うのです。ありがとうございました。野村評議員、お願いします。

○野村評議員　私は日本芸能実演家団体協議会という組織の立場を踏まえて２つ発言をさせていただきます。

１つは、東京都の文化行政の一環としてスタートした伝統ＷＡ感動事業の中で、子供たちへの伝統芸能体験プログラムを実現できたことは、大きな成果であったと思っております。この体験型の事業を文化プログラムの１つに据えてくださることをぜひ御提案を申し上げたい。この５年間にさまざまな場でたくさんの子供たちが伝統芸能に触れてまいりました。開催までの準備期間にこの事業を拡大充実させて、子供たちが海外と日本との交流の懸け橋となる仕組みづくりにつなげることができれば、未来への明るい材料になり得るのではないかと思っております。

今１つは、この評議会設置以来、私は和の空間の創設ということを申し上げてまいりました。申すまでもなく、政治経済の中心地であり、かつ文化の集積地、拠点である東京をさらに世界へ発信していくためにも、専門性を持ち、かつ広く一般に開かれた場としての和の空間が必要です。劇場施設を含む周辺環境全てが和によって成り立つ包括的空間であります。劇場や野外における公演等の実施を通じて、我が国の文化、芸術を諸外国へ発信する絶好の機会であると思いますし、交流の場として活用することも文化プログラムの一環であろうと思います。仮設で設置することも一案でございますが、今後、ぜひ具体的なレベルでの検討を加速させていただきたい。以上です。

○福原会長　ありがとうございます。いつも全くそのとおりだと思っていますが、なかなか現実はこうまでは進んでいなかったわけです。オリンピックを目前にしてこれからどうするかということだと思います。

○野村評議員　先ほど宮田評議員の上野の杜の御発言の中に、私の思う和の空間というものも入り込むといいますか、加えて構想をしていっていただけるとなおありがたいなと思います。

○宮田評議員　十分意識しております。

○福原会長　ありがとうございました。では、花柳評議員、どうぞ。

○花柳評議員　前回の東京オリンピックの時、５０年ほど前ですか。まだ若造だったのですけれども、それなりにいろいろ参加しましたが、これほど大きな規模ではありませんでした。こういう機関もなかったし、それぞれのジャンルで小さくこぢんまりとやっていたのですが、これだけの機関ができたのですから、２０２０年に向けてもう少しグローバルな形で、文化の祭典としたいと思っております。

私も東京藝術大学に教えに入りましたときに、まさか東京でオリンピックがもう一度、自分の生きている間に実現できるとは思いませんでした。先日、オーケストラとの合同で坂東玉三郎氏と御一緒にドビュッシーのプレリュードを踊りました。こういうもののよう

に、藝大は総合的に音楽、美術も含めていろいろな機関があり、私が藝大に教えに行ったときに、藝大こそこれから日本の文化の新しいものができるのではないかという感じを持っていました。在学中、在校中は何もできませんでしたが、藝大は和楽という形で邦楽関係だけは非常にうまくやっているのですが、それぞれのジャンルがなかなか同じ学校にいながらも一緒に合同でやるというような機会がないので、やはり難しい。グローバルな意味で、美術ももちろん含めて、洋楽も和楽も含めたスケールの大きな舞台芸術みたいなものを発表できればいいなと思いまして、そういう意味で、上野に非常に期待をかけております。

外国の方も来るでしょうし、日本の若い方たちのためにも、日本の文化を総合的に発表できる場がほしいと思っております。以上でございます。

○福原会長　ありがとうございました。皆さん、充実した具体的なお話をありがとうございました。知事からこの辺で、何か御感想はありますか。

○猪瀬知事　今お話になったオーケストラとの共演のように、日本の文化とヨーロッパの文化が１つになるというか、また、先ほど三枝評議員が言ったように、東京には、世界で一番交響楽団がたくさんある。あるいはそういう劇場がある。それと、文化としても、今おっしゃられたようなことがある。それを重ねて総合力、上野という場を含めて総合力をうまく発揮すればいいのだろうという自信を今のお話の中で感じました。

○福原会長　すみませんでした。深澤評議員にお話をいただくのが遅れまして申しわけありません。

○深澤評議員　深澤でございます。今回初めてこの場に参加させていただきます。少し考えてまいりましたことは、大きくわけて２つの言葉を挙げました。１つはディシプリン。日本語だとややこしいのですが、修養、秩序、統制とかという言葉で出てきます。日本という国はどういう国なのかというと、きちっとしているねとよく言われます。これは文化の１つで、日本の文化として褒められる言葉です。ワオは英語ですけれども、いきなりワオではない、少しじわっと来る。これは、日本人が持っている１つの大きな文化の過去をなしているのではないかと思います。

もう１つは、地味でさえるということだと思います。派手にやって盛り上げるということを得意とするよりも、むしろコントラスト、つまり地と図の関係を非常にうまく使い分けて、暗いほうをつくって明るさを得るみたいなところがあると思います。冴えわたるということ自体をつくるために国民全員が持っている何とも言えない統制力みたいなものがあると思うのです。それが宗教や国のあるリーダーのリーダーシップや何かに対して統制がとれているというわけではなく、何となくそういうところがあるのですけれども、そういったところを軸に、あるいは土台・プラットフォームにして、いいオリンピック、パラリンピックをつくるということが基本ではないかと思うのです。

いいオリンピックとかいいパラリンピックだったねと言われるということを討議しているのですが、一体なにをしてそれをそうだったねと言うのかはあまり考えないと思うのです。例えば自国の新記録だとかメダルをもらったとか、そういうことによっていいオリン

ピックだったというのは当然なことかもしれないのですけれども、それ以外に、例えばスタジアムが新しくなったとか、非常にメディアがおもしろかったとか、もてなしであるとか、いろんなことがあるわけです。文化とオリンピックを組み合わせて考える場合にやらなければいけないまず１つは、日本に降り立ったときに、その方々がある目的を持って移動する動線のシナリオを書かなければいけないと思うのです。一体どういうことを目的に議論するか。それに対して、どういう文化をそこに配置していくかということを考え、そのビジョンやプランがあると思うのです。シナリオ書きというのもこの評議会では多分非常に重要なファクターになるのではないかと思います。

あともう１つ、忘れてはいけないのは、７年後です。７年前と７年後のメディアは極端に変わっていると思います。例えばオリンピックだったら、まずシンボライズされたスタジアムや競技場をつくりましょうということになるかもしれないのですけれども、７年後のメディアは様変わりをすると思います。そうすると時間軸が入りますから、同時に、あるいは時間を超えて、今のアプリケーションやウエブサイト、ＳＮＳなど、全てのものが混在して、スタジアムという１つの集中した場所でなくても全く同じ体感ができるような状況になると思います。全体を見ながらオーガナイズするというもう一つのシナリオを書くことも非常に重要になってくるのではないかと思います。

それが完成したときに、さすがに日本はよくできている、きちっとしているねということで、文化というか、何となくわからないけれども、よくできているということで、お褒めの言葉をいただくというか、底力の文化を見せることができるのではないかと感じるわけです。

日本がいかにきちっとしているかということについてですが、例えば、雨が降らなくても水たまりがある都市はいっぱいありますが、日本にはないです。壁の裏側に配線がいっぱい這わせてありますけれども、そこがきちっとしている国は日本だけです。道路を掘ってもきちんとしているのは日本だけです。つまり、何をやっても全部がきちっとやらないといけない国なのです。実はそれを声高に言いたくないというシャイなところもあって、その集合体が東京都という巨大な都市を支えています。よくこんなに統制を取れているなと思うのですけれども、一見混沌としていそうで、実は非常に整然としている。これをどのように文化として訴えていくかというところに多分鍵があると思います。

もちろん、今、皆さんがおっしゃったような伝統文化は、その１つの鍵になることは事実ですが、そうでない人間一人ひとりの持っている文化の源みたいなもの、ハート、そこを何とか１つのキーワードにできないかと思うのです。

日本っていいよ、日本のオリンピックだよねというところの褒め言葉は一体どこから来るのかを考える討議の場にしたいと思います。私が挙げた、きちっとしている、修養していく、どんな人でも最後までやり遂げる、隣のビルに塵１つ落とさずにビルディングを壊すことができる、建てることができるということがあると思うのですが、そういったところに日本の文化が育っていると思います。

経済的に見ますと、サービス、あるいはサービスの質や物の質が高ければ高いほどお金

を払う、というのが経済の基本的なルールです。それを守っていないただ１つの国が日本です。なぜかというと、お金は同じでもそれ以上のもの、そのサービスとクオリティを相手に提供することができるということは、多分今、知事がおっしゃった、おもてなしにつながるかもしれません。自分が何かを受け取るということを抜きにして相手に何かできるような仕組みをつくる。例えば全ての人がバッヂをつけて、そのバッヂをつけた人に対しては、言語や交通であったり、何であったりと、全てのことに対してサポートするような、一人ひとりの小さな粒が全体のもてなしを構成するような文化がもし日本という国で、東京という都市でできれば、それは素晴らしいことになるのではないか。小さいけれども、全部固まるとすごい大きなカルチャーになるということを考え出すことが、私の考える文化というものです。

○福原会長　ありがとうございます。全くその通りだと思います。日本料理だって何のかんのというううちに世界で認められるようになりましたものね。ただし、値段は高いとかいろいろ言いますよね。わかる人はわかるようになってしまったわけです。最後になりましたが、秋元評議員にお願いします。

○秋元評議員　皆さんのお話、まさにそのとおりだと思います。ただ、文化というものを頭でっかちに考えてはいけないなと思っています。つまり、この７年間で一番興味深いのは、東京の持つ力、それは予期せぬ力だと思います。もちろんこれを育てよう、こういうことをやろうということも大事ですが､予期せぬものがまた新しい文化を生むと思います。

例えばアルゼンチンにカミニートという町があります。カミニートはタンゴ発祥の地と言われていますが、そこに行ったときに、小さな漁村なのですが、非常にきれいな淡いピンク、淡いグリーン、淡いブルー、いろいろな色がその家々、家並みを飾っていました。壁に塗られていたり､屋根に塗られていたり､しかし､全部中途半端に塗ってあるのです。屋根全部が青でもない、壁全部がピンクでもない。なぜかと聞いたら、それは船の塗料の余ったものだけを自分の家に塗っているので、全部のペンキが足りないからです。それが町全体に予期せぬアートを生んでいるのです。僕は非常に感動しました。こういう計画を立てるとき、きっちりきっちりしすぎていて、結局つまらないものになってしまう、それを僕らは気をつけなければいけないのではないか。つまり、もちろん、計画を立てることも大事です。そこに向かって邁進することも大事です。でも、そこに予期せぬある部分、隙間といいますか、のりしろといいますか、遊びといいますか、これが実は文化が一番育つスペースではないかと僕は信じています。

それから、次のオリンピックのリオデジャネイロまでの間にみんなが文化を持ち寄る、つまり、文化というのは影響されやすい、影響し合うものだと思っています。僕のような仕事をしていますと、本当に小さなきっかけで今の仕事をしています。『文化に触れるきっかけをこの７年間で、まず前半でつくったらどうか』と。つまり、先ほどの伝統芸能、触れる機会がないとみんななかなかそこには行かないのですが、１回触れてみるとすごくおもしろかったと思えるようになる。

僕も先日、生け花をやりました。初めての経験でしたけれども、おもしろかったです。また、陶芸をやったこともあります。そのときも楽しかった。何かに触れるきっかけがあると、子供たちであればそれを将来の職業、将来の夢にする子供もいます。あるいはスポーツかもしれません。つまり、我々はすごく小さなきっかけでその後の人生を生きるんです。このきっかけが一番多く集まっている都市が東京であるべきだと思います。ですから、これからいろいろなキーマンと呼ばれる方に集まっていただいて、伝統分野ではこの方、この分野ではこの方というふうにして、さまざまな人がいろいろな場所で東京のあらゆるところでそのきっかけづくり、おもしろいなというふうなきっかけ、文化に触れるきっかけづくりをしたいなと思っています。以上です。

○福原会長　ありがとうございました。幾つか皆さんから御意見をいただいて、この文化プログラムというのは世界から来る人に見せるばかりでなくて、日本人自体の教育なり開発ができるのではないかということも含めて、それから、必ずしもきっちりした計画だけではなくて、その計画に遊びがなければいけないということも全くそのとおりだと思います。

皆さんからそれぞれ充実した御意見をいただいたのですが、今日予定した時間が少ないものですから定刻になってしまいました。今日御出席でない方も含めてもっと言いたかった、あるいは言ったことを補充したいということがございましたら、どうぞ事務局におっしゃってください。あるいは書面なり絵なりで御提出いただければ、事務局で御意見をいただいて、吉本部会長のほうでまたさらに具体的に検討したいと思っております。

事務局においては、今日の議論を踏まえて今後、皆さんから寄せられる意見を含めて、オリンピック文化プログラムの策定を行うようにお願いしたいと思います。

これで第１８回東京芸術文化評議会を終了しますが、知事が退席しますので、そのままお待ちください。

○猪瀬知事　どうもお先に失礼します。ちょっと一言だけ。今日のお話を聞いていると、我々は無意識に伝統文化をおのずから体験しているところがあって、それが最先端の新しいものを受け入れるところにも無意識の伝統文化が働いている。先ほど杉本評議員が縄文とおっしゃいましたが、そういう様式を既にあらかじめ身につけている。それと最先端のスマートフォンの世界がどんどん進んでいきますけれども、通信の世界がどんどん、ものすごいスピードで進んでいく中で我々の持っている無意識の様式が、どのようにそれが重なっていくのかということが課題になるのではないかと思いました。

では、失礼させていただきます。

○福原会長　皆さんお忙しいところ大変ありがとうございました。

ここで今日の議事を終わりますけれども、どうぞお忘れ物のないように御退席ください。ありがとうございました。

以上